

パブリックアートをめぐる冒険

しみずとしお
清水敏男

美術評論家、
学習院女子大学教授

上海をはじめて訪れたのは1994年の春だった。国際交流基金アセン文化センター（当時）の依頼で、アジアの現代美術展を企画することになっており、その調査で北京、ついで上海を訪れたのだった。展覧会は翌95年に「幸福幻想 Visions of Happiness」というタイトルの赤坂の国際交流基金フォーラムで開催された。アセン文化センターが対象を東アジア、南アジアに拡大し、アジアセンターと名前を変えた際の最初の展覧会だった。

新しい都市には新しい美術表現を◆

当時の上海中心部は広範囲に建築物を撤去し高速道路を建設するなど大掛

かりな工事の最中で、砂埃が立ちこめるなかを大変な苦勞をして歩き回った記憶がある。この訪問で多くのアーティストの家を訪ねた。このときは結局、北京のアーティスト2名（方力鈞と馮夢波）を紹介したのだったが、上海の手応えは強かった。はじめは北京に引かれていた私だったが、徐々に上海に軸足を置くようになり、その後10年間で50回以上、上海を訪れている。

中国は長い眠りから醒め、いまや猛烈なスピードで未来に向かって離陸している。その先頭にいるのが上海である。上海には18階建て以上の高層建築が2800棟あり、世界に類がない壮観を呈している。上海の魅力は、新しい可能性を人々に夢見させてくれるこ

とであり、私が上海に通うようになった理由もそこにある。

私は過去10年間、上海が美術の領域で新しい都市に変貌することにかかわってきた。上海で展覧会を2回企画し、現在は都市計画に美術を活用するプロジェクトに取り組んでいる。

都市にとりよりは、生活に美術は不可欠である。時代には時代の表現があり、人々は自分の時代の表現をかならず求める、と私は考えている。それが同時代の人間に受け入れられるかどうかは別の問題で、多少難しくても少し時間が経てば納得できる美術表現となっていく。

私の仕事は一言でいえば、上海という新しい都市にふさわしい新しい美術表現を一般の人々に体験してもらう機会を提供することである。そして、その第一歩が2000年に開催された上海ビエンナーレだった。それは世界の、そして中国自身の現代美術を中国国内で自由に発表し鑑賞できる機会をつくる、というプロジェクトだった。そして、第二歩はパブリックアートである。都市空間に優れた現代美術作品を設置し、都市環境の美化と市民生活の楽しみを実現しようというもくろみである。



〈上〉五三〇運動記念碑 1990年、余沢勇ほか、ステンレススチール 高さ15メートル。上海の中心、人民広場に建つ政治的テーマの彫刻。市内では大掛かりな彫刻の一つ 撮影：筆者
 〈中〉浦東は上海のなかでも急速に発展している地域で、高層ビルが林立する。2004年夏 撮影：筆者
 〈下〉古い住宅街は次々と取り壊され、新しいビル街に生まれ変わる。開発の猛烈なスピードが新しい中国の誕生を象徴している 撮影：柴永文夫

上海ビエンナーレ開催へ託す思い ◆

上海人たちは新しい中国は上海からはじまるといふ自負が強い。早晩新しい美術が中国に必要なことは目に見えている。それなら上海から始めた方がいいというのが、上海ビエンナーレを企画したものたちの共通の思いだった。

1990年代半ばの中国の美術状況はけっしてよくはなかった。天安門事件の直前に北京で開催された現代美術展が政府によって閉鎖されて以来、現代美術を自由に発表することは不可能だった。若いアーティストたちは空き家の地下室などで開催される違法な展

覧会で表現することが精一杯だった。

もちろん海外で発表することは可能だった。現代中国の美術は海外、とくにヨーロッパ、オーストラリアで90年代半ばから関心が高まり、大きな展覧会が開催されアーティストが招へいされるようになっていた。しかし、彼らが自国で自由に表現することはどうして不可能で、本国で一般の人々が見るの国の現代アーティストの作品を見ることはできなかったのである。

高層ビルが建ち、高速道路が建設されることで都市の風貌が整い、そしてインターネット、携帯電話が人々のコミュニケーションスタイルを変えつつ





しみず としお ●エコール・ド・ルーブル 修士課程修了。東京都庭園美術館キュレーターを経て水戸芸術館現代美術センター芸術監督。著書に『藤田嗣治画集 素晴らしき乳白色』（共著）のほか、訳書に『カンティンスキー』（ラモン・ティオ・ペリド著）、『モディリアニ』（ピエール・デュリユ著）など

あったときに、新しい美術表現だけが欠落しては、精神的にいびつと言わざるをえない。そうした懸念は上海の美術関係者が共有するところであり、上海ビエンナーレの企画が始まった。

上海の美術は北京に比べて政治性・社会性が希薄である。上海の美術の特徴は自分の表現を自由に探求するところにある。そうした自由な風が、上海の美術関係者を駆り立てたのだろう。まず96年、ついで98年の2回、準備的なビエンナーレを開催した。そして、2000年に中国で最初の、政府機関による国際的な現代美術展を上海美術館で開催したのだった。私は委員として、またキュレーターとしてかかわった。

実はこの2年前に準備的な展覧会として「超日常」という展覧会を上海で開催した。これは現代日本を代表するアーティスト（荒木経惟、杉本博司、宮島達男、土屋公雄、曾根裕、平田五郎、森万里子）を紹介したもので、大半のアーティストが上海で新作を制作した。この展覧会は国際的な現代美術はこういうものだということを市当局に知ってもらったことも大きな目的だった。現代美術を危険視しては新しい都市の創造は完成しない。

「超日常」には多くの人々が見に来たが、ラジオで展覧会のニュースを聞いてクラスごとバスで来た高校生など、新しい世代と新しい美術の出会いの可能性を予見させてくれた。

各地に拡大する自由な発表の場◆

上海ビエンナーレは現代中国の美術表現、そして文化全般に決定的な変換点をもたらすものとなった。とくに重要なことは中国人アーティストたちが自由に発表できるようになったことである。

上海ビエンナーレでは国際的に活躍するアーティストに加え、中国人アーティストも展示した。公的な美術館で正式に、前衛的と見なされていた中国人アーティストが展示されたのは、天安門事件以来はじめてのことだった。

上海ビエンナーレが先鞭をつけたこの方向を決定づけたのは2002年に開催された第1回広州トリエンナーレである。「重新解読・中国実験芸術10年」というタイトルのもと、過去10年の中国美術は、前衛勢力のものが正統的美術だったという再解釈が提案され、歴史を書き換えてしまったのである。こうして、新しい美術は市民権を得ることとなり、いまや現代美術は美術

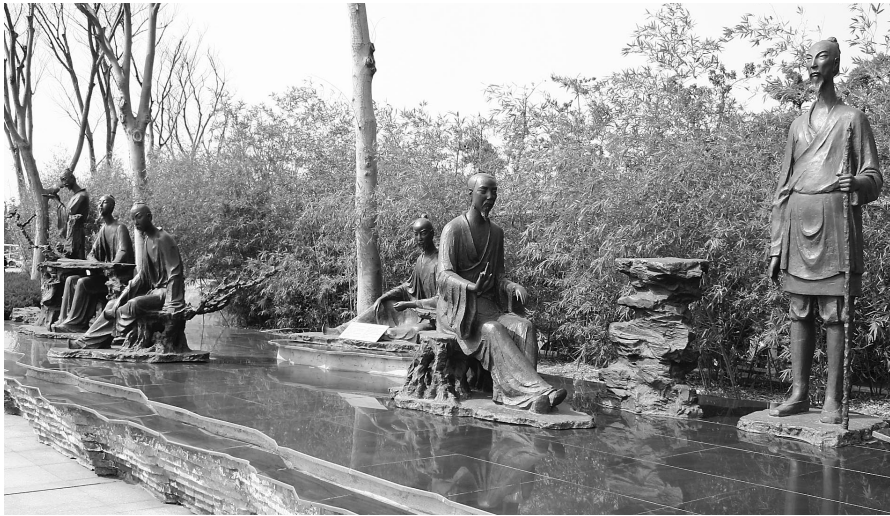
館で見られるのもちろんのこと、ギャラリーでコレクターが買う時代になった。アーティストは成功すれば高収入を得られ、社会的な地位も非常に高くなったのである。

上海では上海美術館のほかいくつかの市立美術館があるが、最近では区立の多倫美術館が活発な活動を展開している。さらにアーティスト、アートディーラーたちが集まってギャラリーやアトリエ公開をしている莫幹山路の芸術地区、ニューヨーク並みの規模と企画力をもった外滩（30年代の面影を残す地区）のギャラリーなどが次々と生まれている。

美術を都市のなかに展示する試み◆

上海の街で時代の表現としての最新的美術をみることは可能となったが、いまだ日本のような大衆的な動員があるわけではない。若い世代の観客は育ちつつあるが、美術館に行くという習慣は、いまだ一般市民には浸透していない。

美術を多くの人々に提供し、都市のなかで展開するためには拠点が必要である。上海市では、都市計画のなかに美術館の建設を組み込み、今後飛躍的



〈上〉東方緑舟公園、上海市青浦区。上海最初の彫刻公園。今後は芸術性が要求されるだろう
 〈右〉外灘人民英雄紀念像、1994年、章永浩他。鑄鉄、高さ10メートル。最も有名な観光地外灘に建つが、こうした彫刻を訪れる人はいない
 撮影：筆者（以下同じ）



にその数を増やしていく方針である。すべてを行政が建設するのではなく、民間の資本によってさまざまな美術館を作っていく。例えば、不動産デベロッパーが美術館建設条件付きの土地を市から入手すれば、そこに美術館を建てなくてはならない。浦東にはそのような美術館が建ち始めている。

ただし、美術館は問題が多い。美術館には専門職員も必要となってくるだろう。かつて私は北京の中央美術学院でアートマネージメントを教え、その後専門課程もできたが、まだまだ未整備である。養成システム、資格などを整備し、社会理念として美術館を位置づけていかななくてはならないだろう。

上海市のもう一つの美術政策は、市内に彫刻を建てることである。市街地の彫刻ならば美術館とは異なり、日常的に多くの市民が親しむことができる。昨年、上海市は「上海市都市彫刻総合計画」をまとめ、新たな彫刻整備の青写真を策定した。

上海は2003年には一人当たりのGDPが5000ドルに達し、07年には7500ドルになる。建物、高速道路、緑地、ショッピングモールなどの社会インフラに加えて、市民の文化芸術への欲求が急速に高まることが予測される。「総合計画」はそうした時代に対応しようというものだ。08年には北京オリンピック、10年には上海エキスポがあり、市街地の美化は急務である。

アーティストに門戸を開く◆

上海市内には現在約10000点の彫刻、いわゆるパブリックアートが建っている。大きいものは約460点ある。また全体の30%が記念碑で、政治的な意味合いのものだ。上海の人口（2000年で1600万人）にすればこの数は決して多いほうではない。

これらの作品の問題は環境と調和したものがないこと、現代的性、国際性がないことなどがあげられる。新興の開発地域である浦東にはロケットリーの中央に堂々と建てられた「日時計」（2000年、仲松作^{ジョウソン}）があるが、これは唯一新鮮な驚きを与える作品で、ほかに秀作は少ない。政治的なもの、社会主義リアリズムの影響にあるもの、ファ



上海南駅 設計REP。上海と杭州を結ぶ円形のユニークな形の駅。将来はリニアモーターカーも発着する予定

ンタステイックなもの、抽象彫刻など多彩だが、一般の人々が親しみ、国際的に誇れるようなものではない。また大半が中国人アーティストの作品で国際都市としては物足りない状態である。

上海市が思い描いているパブリックアートは、環境と調和したもので、世界に誇れるもの、市民生活と密着したもののなど、さまざまだが、それらを実現するために、従来のメンバーに加えて中国各地の美術大学や外国人など多様なアーティストに新しい彫刻プログラムを依頼している。

上海市の予測によれば、今後2020年までに新たに制作され公共の場所に設置される彫刻は9000点という。もちろん大半は私企業が建てるものや寄贈を考えている。彫刻が設置される場所は既存の市街地（大通り、広場、重要建築物の前など）だけではなく、大規模な彫刻公園の新設も想定されている。

公園は上海の都市計画において重要な要素である。これまでのような中心部への一極集中を排し、衛星都市に人口を分散させその間を高速交通網でつなぎ、それらの都市間を公園とすることを計画している。そしてそこに彫刻

を置くのである。

こうした彫刻公園の例として上海西部の青浦区に建設された東方緑舟公園がある。ここは青少年向けの研修施設で彫刻が設置されている。現在の彫刻は美術作品というよりは青少年が中国の歴史を学習するための彫刻だが、今後はより芸術性の高い彫刻が設置された公園が計画されている。

上海南駅彫刻プロジェクト◆

こうして上海ではさまざまな彫刻プロジェクトが進められており、いくつかのプロジェクトにアドバイスを与えているが、人材、技術、費用、工程など前途多難である。そうしたプロジェクトのなかで上海南駅のプロジェクトのアーティストレクターを委嘱された。内容はすでに昨年の5月に一部公表されている。

上海南駅はフランスの設計会社REPがデザインした建物で、上海と杭州（浙江省）を結ぶ鉄道ターミナルである。杭州は古都、観光地であるだけではなく工業地帯としても近年繁栄しており、南駅は重要なターミナルとなることが予測される。建物は大きな円形の屋根が特徴的で、広い公園に囲まれ

上海南駅彫刻案展示会、2004年4月、上海市都市計画展示館。ドイツ人作家フロリアン・クラールの高さ70メートルの大彫刻などの作品案が紹介された



ている。

この広い公園にミニメンタルな彫刻を建てるというのが私たちのプロジェクトである。もともとランドスケープアーキテクトから彫刻を設置する案が出ていたが、いずれも小さなもので、担当するアーティストは決まっていなかった。複数案が提案され、その結果は昨年5月の連休にあわせて、上海市の都市計画展示館で公開され、テレビでも放映された。最終段階では9案が残り、そのなかから専門委員会が最終案を選択、市に提案するという段階である。

いまの時点で1位作品は公表されていないが、このプロジェクトで重要なことは、外国人アーティストが選定されるということである（すべて外国人アーティストが候補として設定された。実は北京ではすでに一足先に市内に多くの彫刻が建てられ始めていてちよつとした彫刻ブームになっている。ところがそれらは皆中国人アーティストのもので、いまひとつ物足りなさが残る。ときには奇異なものもあり、経緯不足が現われている。上海ではそうした轍を踏まないように、より完成度の高い

ものを実現しようというところで、外国人アーティストを起用することを積極的にすすめるようとしているのである。

日本の支援とパブリックアート◆

上海南駅で外国人アーティストが上海市を代表するような彫刻を完成させれば、その影響は中国全土に及ぶことだろう。建築では外国人建築家が主要な建物を設計しているのに比べ、美術ではなかなか参入できないでいた。彫刻の世界でも外国人アーティストに門戸が開放されれば、より質の高い作品が生まれるようになることだろう。

日本の作家も活躍のチャンスがあるはずだが、公的な資金によるものは現在の政治状況からは難しいと思われる。公金を支出する際に、どうしても歴史問題が出てくる可能性があるからだ。しかし、プライベートもしくは半官半民であれば可能性は大きい。昨年、彫刻家伊藤隆道が上海で展覧会を開催し、高い関心を集めたことが記憶に新しい。また昨年末には建築家磯崎新が天津にタワーを建てている。また、そのほかの作家も中国で彫刻を制作しているという話が聞かれるようになって

た。さらに彫刻制作に関する日本の技術力など、中国におけるパブリックアートの進展には日本の協力が大きな力になることと思われる。

中国ではいま、若手アーティストが彫刻を制作したり、不動産デベロッパーと組んでパブリックアートの展覧会を開催したりすることが行なわれ始めている。例えば北京の作家艾未未が故郷の金華（浙江省）で、世界の画家や建築家とともに文化施設をデザインするプロジェクトを進めているのがそのよい例である。深圳の何香凝美術館ではパブリックアートの展覧会が1998年から開催されているが、国際的な外国人作家に混じって若手中国人作家も参加しており、大きな刺激を受けてやがて優秀な人材が育つことだろう。

しかし、それにしても上海の影響力は圧倒的である。上海で行なわれることは中国全土に波及する。上海ビエンナーレが中国における現代美術の封を切ったように、上海でパブリックアートが成功すれば、中国全土に広まっていく。しばらくは上海通いが続きそうである。